

# あだたら

四月二十二日 (月)

湯川渓谷登山道整備下見残雪多く  
十九日の作業は延期

報告 編集部

発行所  
三本松市木ノ枝坂  
あだたら山の会  
編集部



雪の回廊上、丸札10番あたり、9時39分

四月二十二日 (月)、前日は四月山行「塩沢・黒森山」。下見当日の湯川渓谷、スキー場から入った直後から道に雪解け水、金剛清水手前で既に登山道に残雪。

丸札七番の「雪の回廊」上は、七割方雪道。十三番の「三階滝分岐」から上は道は雪で埋まって地面が見えず、滑ったら沢まで止まりようがない状況。屏風岩に到着して、岩の上から奥を偵察。屏風岩向の岩場、

●編集部連絡先  
三本松市木ノ枝坂内1-515  
0243(22)4245  
渡辺 正

岩場頂上の「北ハガ場」から、丸札十七番の岩場道、その下まで雪で埋まっていた。「相恋の滝」も雪で埋まっていた。ここから上の偵察をは断念、昼食を摂って下山した。途中では雪の上に、つい先程通った熊の足跡見つけた、カモシカの足跡も見つけた。登りの時には無かった物だ。塩沢スキー場「全面にカタクリ」とは行かないが、携帯電話塔のあたりは足の踏み場ないくらい咲いて居た。週末あたりはスキー場全面に広がる予感。



屏風岩から、対岸(北ハガ場)を見る



9時3分、金剛清水手前の残雪状況



12時16分、熊の足跡



三階滝分岐上、振り返って見ている、10時32分



一九五九 (昭和三十四) 年七月  
北アルプス烏帽子岳から  
槍・穂高を目指す



報告 □□□□

る昆布など八日分でキスリングははち切れんばかりだった。二本松駅でリュックの重さを計ると三十八キロでした。□□□□ちゃんに見送られ、午後十時に出発した。その時にくれた飲料水、彼の話だと、これからこれが牛乳代わりになるコウラだった。

現在の「あだたら山」の谷が設立する前、二本松の□□運動具店の店主□□さん(現在は米国ロサンゼルス在住で元カリフォルニア農人会長)に集い、山談議に花を咲かせていた。

あだたら山の会が発足三年、当時の山キチガイだった□□□□氏、□□□□氏、□□□□の三人が、飲んだ影響もあったか「北アルプスへゆくべ」となり、三人で相談を繰り返して話し合った。現在のような装備はなく、個人の持つラジエース、コッヘルを持ち燃料は石油、テントは県庁から借りた物です。食料などは米やジャガイモなどは余分に持ち、肉は大きなハム、とる

らなかつた。幸い好天に恵まれて、難所のブナダテ尾根に取り付いた。沢から直ぐに急登が続く、三人は荷物が重く汗だくになった。リーダーの□□さんは体調がおかしくなり、休憩することが多くなった。登山者は少なかつたが、小屋へ荷物を運ぶ人達(六十キロ以上)には次々追い越され心配でならなかつた。木々の間から尾根が見えて来たが、なかなか高度が上がらず、「すぐ尾根だからもう少し頑張るべ」の掛け声でお互いに励まし合った。樹林帯から急に空が見え視界が開けた。道も緩やかに雪渓も現れる尾根に辿り着いた時、遙か遠くあなたに槍が岳の穂先が日に入ってきた。思わず「ヤッホ」と三人で登りだした事を思い出した。

尾根歩きでも□□さんの体調は優れず、下痢が激しくなり、人影もなかつたので「エキジ」を打ち続けた。三日目のキャンプ地水晶小屋あとに向かう途中の午後、前を歩いていたグループが私たちの行くのを待っている様子だった。その人たちの話だと、一人で登山していた女性が体調を崩し、次の小屋まで行くのが困難な状況だった。女性が行きだおれに近い状態で休んでいた。私たちもパテテいたので「いいい」と思っ

た。数人のグループは別ルートなので同行できないとの事だった。見たとしても私たちは最後を歩いているように、後方からの人影はなかつた。まさかこんな所に一人置いてゆくことも出来ないの、リーダーに一人任することにした。□□氏も同感だった。流石にへばっていた□□さんも見かねて、テントも大きいので同行することになった。私が背負っていた重いテントを□□氏が背負い、私が女性のリュックを背負うことになった。まだ結構距離があるので、私が先にテントを張る場所まで荷物を運び、その後、迎えに来ることになった。今でもあの時の事を思い出し、若かつたから出来たのかと振り返る。

双六池にテントを張っていたら、上高地まで同行を頼まれた。明日は西鎌尾根の難所がある。私が背負っていた白米五升を山小屋に売り、少しは楽になった。その時売ったコメの代金は、リーダーの計らいで私にくれた。代金は記憶にないが、嬉しかった事を思い出す。

翌日も快晴に恵まれ、何とか西鎌尾根を登り槍ヶ岳の頂上に立った。日本中の山を一望したような気分になり、今まで苦勞してきた北アルプス裏銀座や明日登る穂高をも下した気分だった。□□さんは下痢に悩まされ、顔を隠して茂みや岩陰で「ダイキジ」を打ながら上高地に向った。槍沢を下り、横尾までは一緒に下ったが、後は上高地までは一本道。私が先に行き小梨平にテントを張り待つことにした。テントを張り準備が出来た頃、二人が着き、女性も疲れしていたが夕食のカレーライスを作り、久しぶりに安心して休んだ。

翌日午前三時、河童橋まで二人に見送られ、穂高岳縦走に出発した。鬱蒼とした針葉樹林の中を、ヘッドライトの灯りを頼りに小走り登ったような気がする。西穂高山荘に着き、中を覗くと水一杯が五円だった。驚いたのが記憶にある。尾根に出た頃は明るく、人の動きもあった。目指す穂高の前には岩でできた山があり、何とこんな所を登るのが、不安だった。西穂独標・ピラミッドピーク・西穂高岳・天狗ノ頭・ジャンダルムと続き、奥穂高岳は見当がつかなくかつた。登山道の両側は深く切れ込み、白いペンキでマルとバツがあり、バツに足を出すに岩がグラつき、何でこんな厳しい所を登るのか自問自答しながら奥穂に向った。ジャンダルムには登らず奥穂に向った。奥穂高の頂上には多くの人影があっ

た。奥穂高岳からの眺めは、北には槍ヶ岳、その北の方角には立山や剣岳があるがその当時は見分けがつかなくかつた。正面には常念岳、すぐ前の瘦せ尾根の向こうには前穂高が聳え、南には少し低い赤茶色の焼岳があり、乗鞍岳や笠ヶ岳が一望できた。谷を眺めれば箱庭の様な大正池や上高地が見え、天候に恵まれ槍ヶ岳をバックに記念写真を取った。何処で昼食を取ったか記憶にないが、穂高の山頂だったかもしれない。眺めがよく直ぐその涸沢岳や北穂高岳が見え、直ぐ目の下には上高地がある。穂高高山荘に泊まる予定だった。友が持つ上高地まで帰ることにした。身軽なので下りも登りも速足で歩き、岩場は足元をしっかりと確認しながら歩いた。涸沢岳から北穂高岳に向う途中には滝谷あり、足がすくむ思いだった。北穂高岳の直ぐ東に大キレットがあるの、上から覗いたが足元は見えず槍ヶ岳に向かうコースの○×の白いペンキ印が絶壁に認められた。北穂からは危険でないところは駆け足で進み、涸沢小屋を過ぎた頃には薄暗くなり「危ないからゆっくり歩け」と言い聞かせながら急いだ。屏風岩を過ぎ梓川の橋を渡り、槍ヶ岳と上高地を結び分岐に出た。この辺からは人の姿はなく、白い砂の道をひたすら上高地に向った。流石に疲れたのか、足の平がクスグツク足が前に進まないような気がした。徳澤園・明神池を過ぎた時、「あと一時間もう少しだ」と動かない足に自分で言い聞かせた。やっと小梨平のテントに着き、顔を出したら□□さん□□君が驚いて時計を見た時午後八時を過ぎていた。□□さんと□□君に、天候に恵まれ素晴らしい光景だったことを伝えた。私の思いが伝わったのか、彼らも明日西穂高から奥穂高岳を登ることになった。□□さんも、あれ程下痢して辛かつたのに一日の休養で体力が回復したのだから、流石に根性の山男だ。

この頃になって持参した太いハムが糸を引くのに気が付き廃棄した。翌日、二人は四時に西穂高から奥穂高岳に向って出発した。私はテントに大字になり休んだ。穂高に向った二人は、ジャンダルム・奥穂高岳からサイディングラートを下り涸沢から横尾に出て、五時過ぎ無事帰還した。共に目的を果たし、がっちり握手したのを思い出す。帰宅後、□□氏が記録したメモ書きが届いた。詳しくは「私の山登りを振り返って」に記載した。二〇一九年四月七日